

1. 内モンゴル歌舞団と日本の関係について考察

—馬頭琴芸術家チ・ボラグのライフヒストリーを中心に—

T.アルタンバガナ（千葉大学大学院 博士後期課程）

【発表要旨】

内モンゴル歌舞団（文工団）は、歌舞団は最初に文工団と呼ばれていた。中国では文学と芸術の工作団体を略称して文工団という。チ・ボラグは1950年代から、現在まで内モンゴル歌舞団で働いていた人物である。チ・ボラグは1980年代中旬から、日本への巡回公演を行い始め、その活動は今まで継続している。だが、内モンゴル歌舞団の創立は1930年代から日本の影響を受けている。本発表はチ・ボラグの日本でのこうした実践や個人のライフヒストリーを通し、内モンゴル歌舞団と日本の関係について考察する。

2. 歌謡『成吉思汗出征の歌』に関する一考察

ミンガト・ボラグ（翻訳家・通訳、馬頭琴奏者、フリーランスライター）

【発表要旨】

満洲国時代、内モンゴルでは学生や軍人の中で『十万の戦士（アルバン・トゥメン・チリグ）』という歌がよく歌われていたという。実は、この歌は日本でおなじみの『成吉思汗出征の歌』と同じ歌である。日本側の記録では『聖成吉思汗の歌』または『チンギス・ハーンの軍歌』といったタイトルで記録されているが、内モンゴルでは歌詞の冒頭の言葉である「十万の戦士」がタイトルとして定着している。

今回の発表では、歌謡『成吉思汗出征の歌』のモンゴル語の歌詞を分析することによって、この歌の出所について検討する。

3. 満州俳句・短歌にみる「モンゴル」—歳時記を中心に—

富川力道（バー・ボルドー）（日本ウェルネススポーツ大学教授）

【発表要旨】

満州文学、とりわけ満州の自然や風土を詠った俳句や短歌の中に当然ながら「モンゴル」が登場する。そのため、満州俳句にはモンゴル由来の季語が浸透しはじめるも満州国の崩壊とともに満州俳句も終焉を迎えた。蒙古風、アルガリ（乾燥牛糞）、黄砂、胡沙来る

などがそれである。使用期間が短かったために俳句の歳時記として定着せず、黄砂関連の表現は春の季語である霾(つちふる)の子季語としては説明されているにすぎない。しかし、それは満州俳句とモンゴル、そして今日のモンゴル俳句を語る時に見落とせない文学実践として取り上げるべき課題である。

4. サイチンガ文学の出発—チャハル盟立青年学校時代の作品—

都馬バイカル (桜美林大学准教授)

【発表要旨】

1938年頃、張北でチャハル盟立青年学校の「読解教科書」が出版されたが、作者名が明記されておらず、その「第7課」には、「Mongγul jalaxus biden-ü uqaxaral」(モンゴル青年たちの覚悟)というタイトルの文章が編纂されている。

発表者は、後の1939年10月『丙寅』誌に掲載された「Mongγul jalaxus biden-ü uqamsiral」(我々モンゴル青年たちの自覚)という作品の原形となっていること、またその周辺の諸々の事情からも、この「Mongγul jalaxus biden-ü uqaxaral」文章こそ、サイチンガが文学者として出発した、最初のモンゴル語の作品ではないかと特定している。